

理学療法士の業務は、法的には基本的動作能力の回復が中心となっています。その基本的動作の中でも、二足歩行こそが理学療法士が担うべき役割です。人間は二足歩行を獲得したことで前足が「手」として機能を果たすようになり、道具を使うことが可能になったのです。この「二足歩行」こそが生活の基盤を構成し、その成否によって生活の質は決定付けられます。

私事になって恐縮ですが、1970年（今から約50年前）に九州労災病院に臨床実習に行ったとき、義肢装具に関するペーパーテストがあり、何と15点（100点満点）という恐るべき結果でした。その後の実習期間は、歩行用装具、大腿義足、下腿義足、義手について学ぶため、毎日のように義肢課（当時は義肢装具士の身分法はなし）を訪ね、採型や製作過程を見学させてもらいました。それらのおかげで実習終了時は義肢装具には並々ならぬ自信を持てるようになりました。そして、71年にはその九州労災病院に就職したのですが、初めてのプレイスカンファレンスで当時リハビリテーション科部長であった原武郎先生に言われた言葉は今でもしっかりと覚えています。それは「義肢や装具を考えるとときに長さの1mm、角度の1度にこだわりなさい。もしかするとその1mm、1度のせいで歩行困難になるかもしれないぞ」というものでした。その言葉は私に決定的な影響を与えました。

ところが最近では、理学療法士が歩行用装具について何もわかっていないという指摘を処々方々でされるようになりました。若い理学療法士たちの言い

分は「医師が処方をし、義肢装具士が製作したものにけちはつけられない」というものです。医療専門職としての知識や責任、そしてチーム医療を考えると頭を抱えてしまいます。その背景として、学校教育および総合臨床実習などが十分に機能していないことが考えられます。

本書では、編集方針として「学生が臨床的かつ科学的思考プロセスを理解し義肢装具への興味を深めること」「実習も本書のみである程度対応できる」ことなどが挙げられており、理学療法士の現状に適した方針になっています。その上で読み進めると、冒頭で「義肢装具療法の流れ」として支給制度などにも説明が及んでいることはいかにも臨床的と言えます。素晴らしいことです。続いて、「歩行のバイオメカニクス」となり、歩行そのものの理解を深めるという手順となっています。正常歩行および異常歩行をまずはしっかりと理解させることは非常に重要なことであり、臨床業務にあって本書は大切な友となるでしょう。そして、義肢装具の具体論になりますが、義肢や装具の関連情報などまでが多彩に盛り込まれ、非常に有益な作りを感じました。また、最後にシラバスまで付けたことは面白い試みです。

最後になりましたが、本書の出現によって、理学療法士養成課程で学生の理解度と関心が高まり、義肢装具の長さ1mm、1度にこだわる理学療法士が増えることを期待します。

（B5判 頁256 2018年 定価：本体4,200円＋税
[ISBN978-4-260-03441-8] 医学書院刊）